

「霊の執り成し」

2014年05月26日

25日（日）の主の日に読むように定められた御言葉はパウロが書いたローマの信徒への手紙8章22節から27節までです。

パウロは持病を抱える病弱な人でした。その体で、現在のトルコ、ギリシャを疾風のように駆け巡って、主イエスの福音を語り、多くの教会を立てました。その労苦についてコリントの信徒への手紙 二 11章16節以降で語っていますが、私たちの想像を絶します。この伝道生活において、パウロはローマ社会の実態を見ています。それは「被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっている」という姿でした。ローマの信徒への手紙が書かれたのは、紀元後57年頃とされています。ローマ帝国は日の出の勢いで勢力を拡大していました。ローマ人たちは「わが世の春」を謳歌していました。しかし、そこから洩れた他民族の人々は生存が保障されない過酷な生活を強いられていたでしょう。パウロは「被造物がすべて今日まで、共にうめき」と人間だけでなく、動植物を含めた被造物全体の苦悩を見ています。これは、いつの時代でも見られることで、現在も変わりありません。世界では紛争が絶えません。紛争の下で恐怖と死に晒されている人々のことを思います。日本では、安倍政権の軍拡アナクロニズム、経済格差、生きる希望を失った虚無、絶滅危惧種など、うめきが充満しています。パウロが見た実態を、私たちも同じく体験しています。

しかしパウロは、このうめきの中から、希望を語ります。滅びへの隷属から解放され、栄光に輝く自由に与り、贖われて神の子となることを待ち望む。そして、この希望によって救われている。見える希望は希望ではない。見えないものを望んでいるから、忍耐して希望に生きることができる。今は破れ切って、出口は見えない。しかし、全き救いに与る望みがあるから、耐えて希望に向かって生きることができる。キリスト教信仰は、これに尽きるでしょう。

そしてパウロは、この信仰には確かな根拠があると続けています。それが「同様に、“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです」という御言葉です。苦難を受けて神を見失い、祈りができず、ただうめくだけである。しかし、そのうめきは聖霊によって、神に執り成されている。どんなうめきの中にあろうとも、私たちの思いを超えて、聖霊によって神に結び合わされている。マルチン・ルターは下記のようなことを語っています。人は苦難の中で信仰を失い、ただ下を向いてうめく。しかし、そのうめきは、どんな整えられた祈りより、神の御前に届いている、と。私たちの信、不信を超えて、一挙一動が神とつながっているのです。

ですから、パウロは、28節で「神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている」と言うのです。私の生を是認し「生きよ」と励ましてくれる、こんな力強い言葉があるのでしょうか。私たちを襲う行き詰まりと絶望は「霊の執り成し」によって神と共にある希望に変えられている。ですから今を、樂觀して、ユーモアを持って、前に向かって生きることができるのです。